教専寺新聞
「いのち」
令和六年三月号
No.244
教専寺ホームページ

仏教婦人会法座

会員追悼法要をおつとめいたしました

二月二十六日に仏教婦人会法座～会員追悼法要～をおつとめいたしました。昨年度は二名の会員様がご往生なさいました。お二方の手を合わせられるお姿を思い出しつつ、ご遺族様とともに福山・沼隈の北山祐章先生のご法話をお聴聞させていただきました。

義援金ご報告

能登半島地震義援金として中国新聞社会事業団様に十万円（教専寺門信徒一同）をお届けいたしました。二月十七日の中国新聞に掲載されました。

3月の予定

【仏婦例会】
3月15日（金）午後１時 30 分より
【春彼岸法座】
3月20日（祝）午前10時より
講師　本田美和子　先生
（広島城学芸員）
【清掃奉仕】
毎週金曜日午後2時より

～教安寺・春彼岸法座～
3月16日（土）午後１時 30 分より

※ご迷惑をおかけします!!!
お寺の本玄関の隣にあるトイレですが、以前より流れが悪く、いつ故障してもおかしくない状態でした。そして先日、とうとう水が流れなくなってしまいました。今、部品を取り寄せてもらっています。
あわせて、玄関の中にある男子トイレも、壁のタイルが落ちてきて危険な状態になりましたので、修理をしています。
お墓参り、ご法事の方々には大変ご迷惑をおかけしますが、もうしばらくおまちください。

仏さまの光に照らされて

私の心に明りがつく

学生時代、「夏は肝試し」と仲間とともにろうそくを手に漆黒の闇に包まれた墓地へ足をじりじりと踏み入れる。やがて予想だにしない悲劇が起きた。突如、先頭のMが「おしっこ」と言って、ろうそくを放り出し、もと来た方角へ一目散に駆け去ったのだ。更に悪いことに、放り出したろうそくが地面に転がり、風に吹かれて消えてしまった。まさにまっくら。

ところが、僅か数秒の間に闇は消えた。Mが持っていたろうそくの灯りを凝視していた我々は、月と星が放つ柔らかな光に気づいていないだけだったのだ。我々はすでに光の中にいた。

自分が手に持つ光は、自身を照らさない。未来とか社会とか他人とか、自分の外側を照らそうとする。それどころか手元の明かりを強くすればするほど、外からの光に気づけない。自分の力で光らせているものが弱まった時、やっと自分を照らす光があったと気づく。だから、自分の光だけを頼りにしている間は、なかなか仏さまの光(智慧)を素直に受け取れない。

すでに仏さまの光に包まれていることに気づかされるのは、自力の光が揺らいだ時だ。その瞬間、仏さまの光は私たちの心に、消えないぬくもりとして灯ってくださる。それは弱さや醜さも照らすが、同時にあたたかい。仏の救いは、私の努力を求めない。仏さまが欲望だらけの私を受け入れてくれるから、私も自分を受け入れることができる。やっと安心できる光に出遇える。

藤丸智雄著「心に響くことば」

～法話カレンダー二〇二四年より